

地域情報（県別）

【福井】「医師でなくスタッフにかかりつけ機能」在宅注力法人の外来展開とは-紅谷浩之・医療法人社団オレンジ理事長に聞く◆Vol.1

2023年3月10日 (金)配信 m3.com地域版

「患者さんともっと早く出会いたい」――。在宅クリニックを運営する医療法人社団オレンジ（福井市）の紅谷浩之理事長はこんな思いを胸に、2016年から外来診療所「つながるクリニック」も営む。同院では在宅医療の現場を経験した看護師と医療事務が患者からの信頼を得ており、かかりつけ機能を担っているという。「地域に出る医療事務」など在宅経験を生かした法人の外来展開とは。（2023年2月18日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



紅谷浩之氏（法人提供）

――医療法人社団オレンジは2011年から在宅医療に注力する「オレンジホームケアクリニック」を運営する一方、外来診療所「つながるクリニック」も営んでいます。外来診療の開始はどんな経緯だったのでしょうか。

開業当初から在宅クリニックを作りたいというより、「地域に必要とされるものを提供したい」と考えていました。私はへき地医療を経験して在宅医療の価値を感じたのですが、当時、地元でもある福井市にはこれに注力する医療機関がなかったのです。

外来診療所の開設も同様、根っこには私たちの問題意識があります。在宅医療では、がんや神経難病などの病気が進んでから患者さんやご家族と出会うことが多く、「もっと早かったら……」と思うことが少なくありませんでした。患者さんと早く出会えていれば、生活や人生に関する話し合いや提案がもっとできたのに、とスタッフからも声が上がっていました。

――在宅医療の経験から外来診療所の必要性を感じたと。

まずは地域の人が気軽に立ち寄って生活や健康の相談ができる場をつくろうと、2013年に福井駅前の新栄商店街の一角に「みんなの保健室」を開設しました。ここでは人々の訪問を待つだけでなく、スタッフが地域に出て催しに参加したり、気になる方のご自宅に伺ったりしました。例えば、熱中症を繰り返す人がいたらご自宅のエアコンなどを見に行く、といったことです。

――その3年後につながるクリニックを開院します。

これは縁がありました。高校からの友人が親の診療所を引き継いで運営していたのですが、継続が難しくなり、「どうしようか」と相談してくれたのです。患者さんと早く出会いたいと思っていた私は友人と話し合った末に事業

承継を決断し、内科と小児科を標ぼうする「つながるクリニック」を開きました。

ただ、気がかりはありました。この診療所は承継までに40年ほどの歴史があったため建物は古く、「昔ながらの診療所」を患者さんに感じさせる、つまり「痛い」「つらい」「苦しい」ときに思い出される立ち位置からは脱しづら
いのではないかと。病気になる前からつながりたいと考えていた私たちはこんな懸念を踏まえ、みんなの保健室の
機能を移してクリニックを拠点に先述の地域活動を展開しました。外来で患者さんを待つだけでなく、「自ら地域に
足を運び、ちょっとしたおせっかいもする外来クリニック」をコンセプトの一つに据え、運営を続けました。

——**つながるクリニックは2022年12月に法人運営の複合施設に移りますが、そんな背景もあったのです。現在、
ホームページには6人の医師が担当医として掲載されています。**

複数の医師が日替わりで診療する一方、看護師と事務スタッフがかかりつけ機能を担っていることが当院の特徴で
す。それぞれ3人いる両職種が「患者さんの良い相談相手」として活躍しているんですね。患者さんの体調が悪くなっ
たとき、スタッフの名を挙げて「相談したい」と来院してくださることもあります。

看護師と事務はともに在宅医療の現場を経験しており、中にはみんなの保健室で地域活動に携わっていた人もいま
す。法人では多様な働き方を推進しており、医療事務として入職した人も在宅クランクの仕事を経験します。医師と
一緒に患者さん宅を訪問して患者さんやご家族の話に耳を傾け、各種トリアージや訪問スケジュールの調整を行いま
す。受け付けとレセプト業務が多くなりやすい一般的な医療事務より、「アクティブ」と言えるのではないでしょ
うか。



現在のつながるクリニックの受け付け（法人提供）

——「医療事務も地域に出る」のは確かに特徴だと思いました。こういった経験から「患者さんの良い相談相手にな
っている」のは想像しやすいです。

一般的な診療では医療事務が受け付けをし、看護師が予診をして医師が問診する、という流れになりますが、当院
では医師の診療後に患者さんが看護師や事務と数十分ほど話して帰ることもあります。スタッフは在宅医療の場で末
期がんなど重い病気を抱える人やその家族と対話してきた経験があるので、医療事務であっても患者さんが複雑な二
ーズを抱えていた場合、カウンターから出て待合スペースのソファと一緒に座るなどして話し合っています。

——**つながるクリニック開院から7年経ちます。現在の手応えは。**

外来診療所としてスタートしましたが、現在は在宅医療とオンライン診療も行っています。予防接種や健診に加
え、コロナ発熱外来を運営して発熱患者用のオンライン診療を行い、集団接種に医師を派遣しています。地域のクリ
ニックができることは広く行っているのではないのでしょうか。中でも、予防接種と健診は私たちの希望だった「病
気になる前からつながる」方法として有効だと感じています。地域ニーズも大きく、利用者数は開院から右肩上がりに
増えています。

法人では在宅特化のオレンジホームケアクリニックを運営していますが、つながるクリニックで在宅医療を行って
いるのは患者さんを考えてのことです。先述の特徴から患者さんの中にはスタッフと信頼関係を築いているケースが
ありますし、また地域の特性から積雪などで外出が難しくなる時期もあります。「冬は難しいものの夏は来院でき

る」方もいるので、患者さんの性格や生活環境、季節などを考慮し、ニーズに応じてつながるクリニックで在宅医療を活用することもあります。

現在、外来では1日に20～30人ほどが来院し、在宅医療では35人ほどを担当しています。

——**予防接種の対象となる子どもやその親と出会えると、「早くつながる」を実現できそうです。**

「ここに来れば何か分かるよね」と地域の人に自然に思ってもらえるようなお付き合いが広がればいいですね。「ぜひ在宅医療を知ってください」といった形式的なプレゼンはしたくないので、患者さんと緩やかにつながりつつ、仮に「在宅」という言葉を知らなくても困ったときに相談してくれれば。子どもでも交通事故に遭うなどして在宅医療が必要になることはあるので、その意味でも多世代とつながりを持つことは価値があると思います。

◆**紅谷 浩之（べにや・ひろゆき）氏**

2001年福井医科大学（現福井大学医学部）卒。救急医療やへき地医療などを経験し、2011年に在宅医療に注力する「オレンジホームケアクリニック」を開院。「地域の人と早くつながりたい」と2016年に外来診療所「つながるクリニック」を、2022年にクリニックとカフェ、ジムが入居する複合施設「つながるベース」を開設した。医療法人社団オレンジ理事長。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

